

## 「シュターツオーパーはウィーンの心」

～指揮者・大町陽一郎さんに聞く～

国際的に活躍する東京フィルハーモニー交響楽団専任指揮者、大町陽一郎さんに、ウィーンで音楽を学んだ若いころの思い出の話を聞いた。オーストリアが独立を達成した1955年のシュターツオーパー（国立歌劇場）再建のこけら落とし公演を見た大町さんは「シュターツオーパーはウィーンの心」と語っていた。

大町さんは1954年にウィーンに音楽留学した。まだ、オーストリアが第二次世界大戦の後、米国、英国、フランスとソ連による4カ国の分割管理下にあり、戦争の爪痕が残る時代だった。音楽の都ウィーンを中心街にも街灯はなく、夜間に散歩しても「真っ暗だった」。今ならショッピングを楽しむ観光客でにぎわうケルトナー通りは当時まだ対面交通で、まちのあちこちに、がれきの山、屋根や壁のない建物、爆撃の跡も残っていた。

文部省の留学試験を受け、1ドル360円で外貨持ち出し制限があった時代に、2000ドルを支給されての留学だったという。大町さんは「ウィーンのまちには随分、不思議な人がいっぱいいた」と当時を振り返る。どの国の関係者か得体の知れない人物が結構いて、外交官から「道で話しかけられても相手にならないように」とアドバイスされたこともあり、大町さんは「スパイの協力者を探しているのかも」といぶかしく思っていたそうだ。まさにウィーンは戦後の復興のただ中であつた。

そして、オーソン・ウェールズ主演の映画「第三の男」の世界そのものだったらしい。「第三の男」に登場する大観覧車とプラーター公園のある2区の辺りは、4カ国分割占領のソ連地区だった。ちょうど大町さんがウィーンに留学する前年の53年に映画「第三の男」が日本で封切られ、映画を見た父親から「不気味な町だぞ」と感想を聞かされたという。

国立歌劇場が再建された1955年は、オーストリアが主権回復条約（国家条約）に調印して4カ国占領から独立し、「永世中立」を宣言した年だった。



大町陽一郎さん(左)と近藤常恭さん=08年7月4日撮影

その年の11月5日に国立歌劇場の再建記念公演があった。こけら落しの演目はベートーベン作曲の「フィデリオ」。監獄にとらわれた囚人たちが「フライハイト（自由）、フライハイト」と歌う場面は、戦争の記憶から解放され自由を謳歌するオーストリアの姿と重なり合う。国立歌劇場の屋外にもスピーカーが設営され、大勢の人々が歌劇場を囲みウィーンのまちが感動に包まれた。2階バルコニーの奥の席で、自分の目で確かめたその華やかで歴史的な光景を今でも鮮明に記憶している大町さんは「大変なものだった。切符係まで正装に身を固めていた」と懐かしむ。著名な指揮者ブルーノ・ワルターやオペラ歌手エリザベート・シュワルツコップも客席にいた。伝説的な催しだったという。



シュターツオペー(国立歌劇場)

「シュターツオペーがなければ、ウィーンでない」と大町さんは説明する。そして、「ウィーンフィル、シュターツオペー……。世界に冠たる芸術の都・ウィーンの誇りだ」と力を込めた。

第二次世界大戦で、ヒトラーのナチス・ドイツに併合され、ソ連と戦い、ソ連が戦時下・戦後と圧政を敷くなか、オーストリアは地理的にも、政治的にも厳しい環境から復興を遂げた。「永世中立は、戦争に巻き込まれた反省から、今後はどの国とも手を結ばないと決意したオーストリアの知恵だ」。大町さんはそう指摘する。

57年にはベルリン・フィルと、59年秋にウィーンフィルと有名な指揮者カラヤンの助手として日本での演奏旅行に同行した。大町さんは今でもほぼ毎年のように、夏休みシーズンをウィーンで過ごしている。この夏も、ホイリゲでカラヤン夫人と時間を過ごしたという。

夏の間、ウィーンのラートハウス（市庁舎）前で上映される音楽映画を見ることが大好きで、大町さんはラートハウス前の上映会を「ウィーンの夏の風物詩」と言った。

「本当にいいですね。選りすぐりのオペラや音楽会を大音響で満喫できる。夕涼みにうってつけ」と太鼓判を押す。映像も音響も迫力があり、指揮者の表情まで大写しされる映画ならではの醍醐味があり、室内の演奏会とはまた一味違った味わいがあるのだという。大町さんは「音楽の都ウィーンの夏の楽しみ方です」と推奨していた。

【中尾卓司】

<大町 陽一郎（おおまち・よういちろう）>

1931年東京生まれ。54～56年、ウィーン国立音楽大学指揮科に学ぶ。1961年、東京フィルハーモニー交響楽団常任指揮者。80年にウィーン国立歌劇場で日本人として始めて指揮、82～84年国立歌劇場専属指揮者。現在、東京フィルハーモニー交響楽団専任指揮者。